

富 山 県 民 の 飲 酒 実 態 調 査

— 1 企 業 体 の 場 合 —

富山市民病院神経科精神科 草野 亮, 山野 俊一
富山保健所 中川 秀幸

はじめに

私どもはこの数年来、富山県民の飲酒実態調査を行っているが、^{1)~6)}今回は職業単位としての民間の1企業体を対象としたので報告する。

この企業体は、地元北陸地方における大企業の1つで、とくに富山県内一円に営業所をもち、その職員はほとんど富山県内あるいは北陸の出身者で占められている。この意味でこの調査の趣旨からして、きわめて適切な調査客体であると思われる。

調査方法および調査対象

調査方法は、額田を班長とする文部省科学研究費総合研究「アルコール飲料の社会医学的研究」(1972)で行われたアンケート方式⁷⁾によったが、アルコール中毒に関する意識調査⁴⁾に関して著者らの独自の質問を追加した。

調査対象は、H社の、富山市を含め呉東地区の男子職員全員とした。総数 1,054名のうち 823名の回答を得た。回答率は78.1%であった。その年齢分布は表1のごとくである。

表1 年 令 分 布

年代	H 社		全 国	
	例 数	%	例 数	%
10才代	14	1.7	54	1.6
20才代	180	21.9	876	25.6
30才代	154	18.7	982	28.6
40才代	212	25.8	941	27.4
50才代	263	31.9	396	11.6
60才代	0	0	178	5.2
計	823	100.0	3427	100.0

全国平均(一般人)⁷⁾との比較の形で報告するが、一部については私どもが先に報告した富山県の学校教師と比較した。¹⁾

データの統計処理はX²検定を用いた。

調 査 結 果

まず初飲年齢について述べると、表2はH社と教師¹⁾と全国一般人⁷⁾の平均の調査をそれぞれ比較したものである。年齢は15才から29才まで2年刻みとし、飲酒者を累積100分率で表わして3者を比較した。この表をみると、

表2 初 飲 年 令

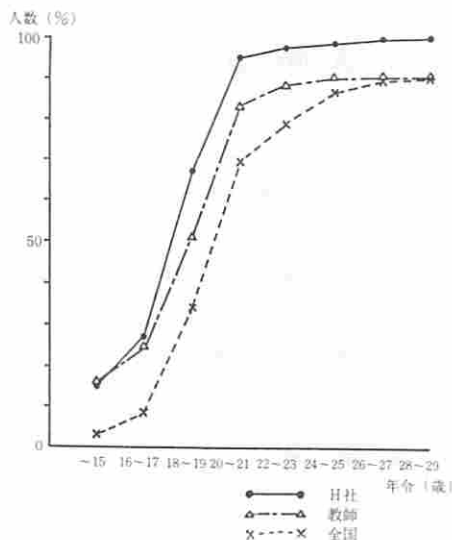
年齢(才)	H社(%)	教師(%)	全国(%)
~15	14.9	15.6	3.1
16~17	27.0	24.6	8.7
18~19	67.6	51.9	34.1
20~21	95.3	83.2	69.7
22~23	97.8	88.7	78.8
24~25	98.5	91.4	87.6
26~27	99.2	91.8	89.9
28~29	99.5	91.8	91.3

** ** ** **p<0.01

H社、教師とも17才以下の低年齢層の飲酒率が全国平均よりかなり高いことがわかる。さらに、H社は29才までにはほぼ全員に近い99.5%の人が飲酒体験を済ませている。教師と全国平均では、その年齢までにはまだ8~9%の未経験者が残されている。その表1をグラフであらわしたのが図1で、H社が全年令層を通じて、全国平均より高い。ちなみに教師のグラフは15才以下はH社に近いが、年齢の上昇とともに次第に全国平均の曲線に近づき29

才近くなると全国平均の値には一致する。

図1 初飲年令



飲酒の頻度について、H社と全国平均を比較すると表3のごとくになる。「毎日飲むもの」は、H社が21.1%と全国平均の30.4%よりかなり少なく、「週に4～6日飲むもの」

表3 飲酒の頻度

頻度	H 社		全 国	
	例 数	%	例 数	%
毎 日	174	21.1**	1042	30.4
4～6日	202	24.5**	401	11.7
1～3日	241	29.2	921	26.9
ほとんど	169	20.5	679	19.8
やめた	13	1.6**	120	3.5
飲まない	25	3.0**	264	7.7
計	824	99.9	3427	100.0

**p<0.01

が24.5%と全国平均の11.7%より多い。一方「やめた」と「飲まない」がそれぞれ1.6%、3.0%と全国平均のそれぞれ3.5%、7.7%よりも少ない。すなわち、毎日飲酒するものや全然飲酒しないような両極端が少ない。

つぎに、おもに飲む酒の種類では、表4のごとく、清酒についてはH社も全国平均でも過半数の59%前後ではほぼ同様であるが、H社ではビールが27.8%と全国平均の11.9%より

表4 酒の種類

種類	H 社		全 国	
	例 数	%	例 数	%
清 酒	464	59.4	1942	58.7
ビ ー ル	217	27.8**	591	17.9
ウイスキー	88	11.3	383	11.5
焼 酎	1	0.1**	392	11.9
そ の 他	11	1.4	0	0
計	781	100.0	3308	100.0

**p<0.01

多く、焼酎が0.9%と全国平均の11.9%よりかなり少ない。

表5 宴会での飲酒量

量	H 社		全 国	
	例 数	%	例 数	%
1合以下	57	7.4**	345	11.6
1～2合	149	19.4**	718	24.2
2～3合	205	26.7*	924	31.1
3～4合	204	26.6**	357	12.0
4～5合	102	13.3**	626	21.1
5合以上	50	6.5**	0	0.0
計	767	99.9	2970	100.0

*p<0.05 **p<0.01

宴会での飲酒量は表5に示した。1合以下、1～2合、2～3合のいずれも、H社は全国平均より低く、3～4合、5合以上ではH社は全国平均より高い。このことは、宴会での飲酒量が、H社は全国平均より比較的多いことを意味している。

表6 晩酌量

量	H 社		全 国	
	例 数	%	例 数	%
1合以下	156	27.5**	1686	54.7
1～2合	324	57.0**	1142	37.0
2～3合	81	14.3**	256	8.3
3～4合	6	1.0	0	0
4～5合	1	0.2	0	0
計	568	100.0	3084	100.0

**p<0.01

晩酌量では、表6のごとく、H社は1合以下が全国平均よりかなり低く、1～2合、2～3合、3～4合、4～5合が全国平均より高い。また、H社では過半数を占める飲酒量

は1～2合であり、全国平均では1合以下であるというように、H社の飲酒量は全国平均より1ランク上のようである。

表7 飲酒のきっかけ

きっかけ	H社		全国	
	例数	%	例数	%
行事・お祝	352	43.7**	342	10.8
つきあい	271	33.7**	1955	61.8
なんとなく	70	8.7	206	6.5
仕事上	61	7.6**	57	1.8
親のすすめ	20	2.5**	32	1.0
一人前に	16	2.0	57	1.8
その他	15	1.9	69	2.2

**p<0.01

飲酒のきっかけについては、表7のごとく、H社では行事・お祝い43.7%で第1位、つきあいが33.7%で第2位であったが、全国平均ではつきあいが第1位、行事・お祝いが第2位と逆転している。また、H社では仕事上や親のすすめが全国平均より有意に高かった。

表8 飲酒の理由

理由	H社		全国	
	例数	%	例数	%
たのしむ	286	30.5**	623	24.2
疲れをなおす	275	29.3	832	32.4
つきあい	220	23.4**	487	18.9
よくねむるため	63	6.7**	300	11.7
食欲をます	33	3.5**	206	8.0
元気を出す	23	2.4	92	3.6
苦痛をやわらげる	6	0.6**	0	0
その他	33	3.5	32	1.2

**p<0.01

飲酒の理由については、表8に示した。H社では全国平均に比較して、たのしむ、つきあいが多く、よくねむるためや食欲を増すための飲酒がわずかながらみられた。

次に、飲酒の抑制に移ろう。表9のように、「飲んでほならない時断われない」が6.0%と全国より有意に高い。また、「宴会で飲む量が加減できない」は17.5%で全国の6.0%に比べると異常な高さである。一方、「飲む

表9 飲酒の抑制

	H社		全国	
	例数	%	例数	%
飲んでほならない時断われない	48	6.0**	120	3.8
宴会でのむ量を加減できない	140	17.5**	190	6.0
のむ量を減らそうとした	214	26.8	775	24.5
断酒しようとした	22	2.8**	335	10.6

**p<0.01

量を減らそうとした」は、26.8%にみられたが、全国との間に有意差はみられなかった。さらに、「断酒しようとした」は2.8%とわずかで全国の10.6%より有意に低い。

表10 酒席への出席

	H社		全国	
	例数	%	例数	%
必ず出席	66	8.1	353	10.3
普通に出席	724	88.4**	2776	81.0
さける	24	2.9**	250	7.3
ことわる	4	0.5	24	0.7
機会がなかった	1	0.1	24	0.7
計	819	100.0	3427	100.0

**p<0.01

酒席への出席は、表10のごとく「必ず出席するもの」は両者に有意差はなかったが、「普通に出席するもの」はH社に有意に多く、「避けるもの」が有意に少なかった。

表11 酒の上の失敗

	H社		全国	
	例数	%	例数	%
他人に迷惑	164	20.5**	250	7.9
けが	59	7.4**	139	4.4
けんか	45	5.6**	95	3.0
交通事故	12	1.5	46	2.1
仕事上のミス	3	0.4	19	0.6
計	283	35.4**	549	18.0

**p<0.01

酒の上の失敗については、表11のごとく、H社では全体の35.4%の高率にみられ、全国

では18.0%と低かった。失敗の内訳では、他人に迷惑をかけたが20.5%と全体の約5分の1にみられ、全国の7.9%に比べ異常に高かった。けがやけんかも有意に高かった。

表12 酒は人生に必要なか

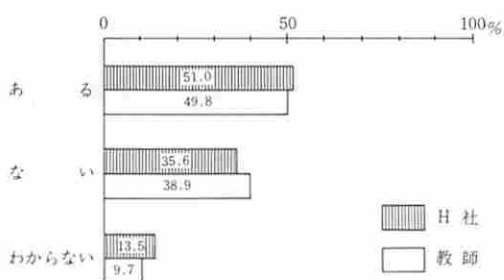
	H 社		全 国	
	例 数	%	例 数	%
必 要	323	39.3	1261	36.8
時に必要	448	54.6*	1714	50.0
不 必 要	20	2.4**	284	8.3
わからない	30	3.7	168	4.9
計	821	100.0	3427	100.0

*p<0.05 **p<0.01

「酒は人生に必要なか」という問いには、表12のごとく、「必要」と答えたものは両者間に有意差はみられなかったが、「時に必要」と答えたものがH社に多く、「不必要」と答えたものが全国に多かった。

次に、アルコール中毒に対する意識について調査した。この項目は著者ら独自の調査であるため、全国調査が行われていない。参考のため、先に報告した富山市内の学校教師とを比較した。

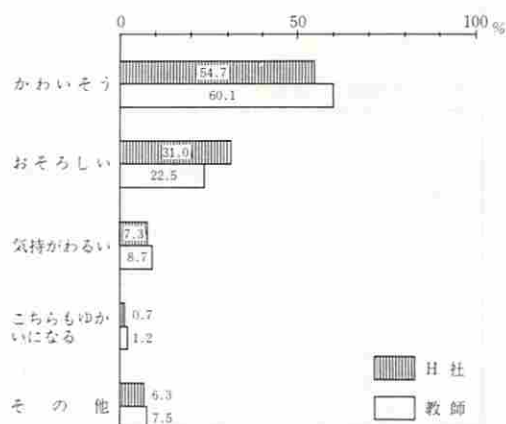
図13 アル中者を見たことがあるか



「アルコール中毒者を見たことがあるか」との問いに、「ある」と答えたものは、表13のごとく、H社では51.0%と約半数で、教師の49.8%との間に有意差はなかった。「ない」と答えたのは、H社で35.6%にみられ、教師の38.9%との間にも有意差はみられなかった。

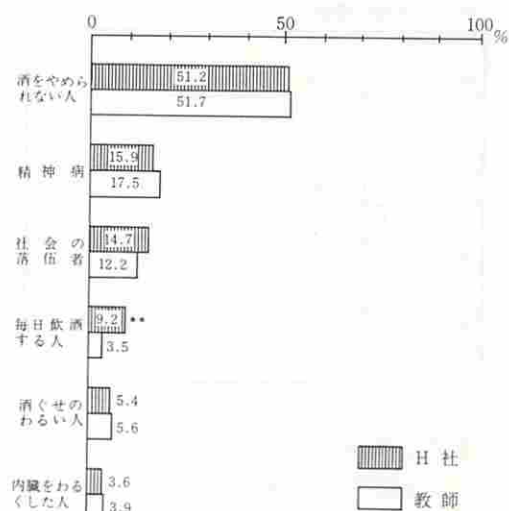
アルコール中毒者を見たことのある者につ

図14 アル中者を見たときの気持



いて、その時の気持について問うと、表14のごとく、「かわいそう」54.7%、「おそろしい」31.0%、「気持ちがわるい」7.3%、「こちらも愉快になる」0.7%の順で、教師との間に有意差はみとめられなかった。

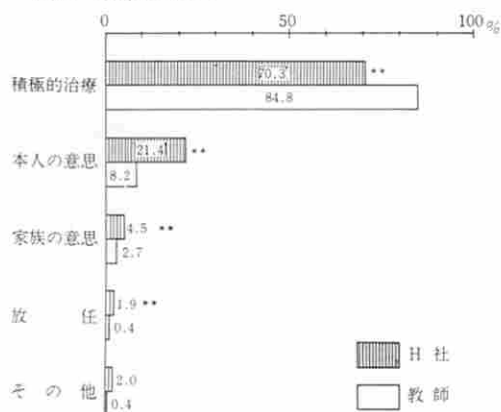
図15 アルコール中毒とは



つぎに、全員について、「アルコール中毒とは」の問いに対して、表15のごとく、酒をやめられない人51.2%、精神病15.9%、社会の落伍者14.7%、毎日飲酒する人9.2%、酒ぐせのわるい人5.4%、内臓をわるくした人3.6%の順であった。教師との比較では、順位に差異はみとめられなかったが、「毎日飲

酒する人」についてはH社が教師よりも有意に高かった。

図16 治療について



最後に、「アルコール中毒者の治療についてどう思うか」という問いに、表16のごとく、積極的に治療すべきと答えたものが70.3%、本人の意思にまかせるが21.4%、家族の意思にまかせるが4.5%、放任すればよいが1.9%の順であった。教師と比較すると、H社では積極的治療が有意に少なく、本人の意思、家族の意思や放任がいずれも有意に多かった。

考 察

初飲年齢が、全国と比べ、H社での若年傾向が目立ったが、これはH社の特徴ではなく富山県民の一般的な傾向³⁾である。比較的日本的伝統が残る富山県は冠婚葬祭がさかんで、その際に初飲となることが多いようである。「飲酒のきっかけ」が行事・お祝いとしたものが第1位で、43.7%と約半数に近かった。「親のすすめ」も全国より多く、当県が若年者の飲酒に寛大であることをしめしている。

さらに、やはり初飲年齢で、H社では成人に達した21才までの間に全体の95.3%の人が飲酒経験を完了しているが、全国では69.7%と低い。先に私どもが、報告した県民の一般人の場合は、89.1%で全国よりやや高かったが、このような県民の一般的傾向に加えて、就職という特殊要因も関連するのであろう。

また、H社では29才までの間に、ほとんど全員に近い99.5%が飲酒経験をもつに至るが、全国では約9割の91.3%に過ぎない。これも、県民の一般成人の調査では98.5%で、県民のお酒親和型の傾向に、会社の行事や上司・同僚とのつきあいなどの要因が加わるものと思われる。

飲酒の頻度については、H社では全国に比して、毎日飲酒者が少なく、週4～6回の飲酒が多かった。当県の一般成人は、全国よりも毎日飲酒者率が高い(41.6%)³⁾であるので、これはH社の特徴である。一般に勤務労働者は、社交上飲む機会飲酒の率が高く、晩酌などの個人飲酒がや、少ない傾向であることが報告されているが、上の結果はH社のこのような特徴をしめすものであろう。

飲酒量については、宴会ではH社は、全国に比して3合以下が少なく、3合を越えるものが多い。すなわちH社には、全国平均よりも酒豪が多いといえる。晩酌量についても、H社は全国に比し、1合以下が少なく、1合を越えるものが多く、宴会と同様の傾向がみられる。しかし、このような酒量の多い傾向は、富山県民の一般的傾向でもあった。³⁾

飲酒理由については、「たのしむ」と「つきあい」が全国よりも有意に高かったが、前者は県民のお酒への親和性、後者はつきあいを大事にする風習と関係があるろう。なお、「苦通をやわらげるため」が全国にはみられないにかかわらず、H社ではみられたが、がまん強い県民性のためストレスも多く、酒で苦痛をやわらげる必要もあるのかも知れない。⁵⁾

飲酒の抑制、すなわち「飲んでほならないとき断われない」とか「宴会で量を加減できない」が全国より高いのは、やはり相手の気持を損うまいとするいじらしい県民性の表れで、つきあいの良さとも一脈相通ずる。⁵⁾「断酒しようとした」が低いのは、飲酒文化にどっぷりとつかった県民にはそのような必要性をみとめないのであろう。ときには、断酒が

つきあいの悪さという県民にとっては悪徳に通じる場合があるのであろう。他県に比し、当県での断酒会活動が低調なことは、そのようなこととも無縁ではないかも知れない。

酒の上の失敗は、全国の優に2倍の高率にみられた。失敗の内訳は、他人に迷惑をかけたがもっとも多く、全国の2.5倍の高さであった。それ程でもない迷惑やミスを自分自身では、大変なことをしたように深く考える県民性も考慮にいれなければならないが⁵⁾、けがやけんかもやや多く、飲酒量が全国よりも多いことと関連があるのかも知れない。

酒が人生に必要と考える人は、全国よりも多かったが、県民の一般成人なみで³⁾、これは富山県の一般的な考え方と変わらなかった。

最後に、アルコール中毒に関する意識調査について述べる。

巷間でどのような程度に、アルコール中毒者（アルコール依存症者）を目に触れているかを調べた。H社では約半数の51.0%に過ぎなかった。同じく通勤勤務者である教師の率と変わらなかった。

アルコール中毒者を見たことのあるものについて、見たときの気持ちについて問うたところ、好意的感情（かわいそう・こちらも愉快になる）が55.4%と高く、嫌悪的感情（おそろしい・気持ちがわるい）が38.3%で低かった。飲酒に寛容な態度の一端をしめしていた。しかし、教師との比較では、好意的感情は教師の61.3%より低く、嫌悪的感情は教師の31.2%より高かった。

「アルコール中毒者とはどのようなものか」という問いに、酒をやめられない人と答えたものが半数の51.2%で第1位であった。2位以下の精神病(15.9%)、社会の落伍者(14.7%)、毎日飲酒する人(9.2%)、酒ぐせのわるい人(5.4%)、内臓をわるくした人(3.6%)は、それに比するとぐんと少なくなる。アルコール中毒の定義について、WHOは精神依者と身体依存を重視して、アルコール依存症

と呼ぶことを提唱したが、「酒をやめられない人」がほぼその定義に近い。H社の約半数にあたる人達が正しい考え方をしているといえる。教師との間にはあまり差はみられなかった。

アルコール中毒の治療に関しては、積極的に治療すべきが、もっとも多く76.3%にみられたが、それは教師よりやや低く、本人や家族の意思にまかせるべきが教師よりやや多かった。教師の教育者的な厳しい態度に比して、H社では寛容な態度が見られる。

ま と め

1. 初飲年齢は、全国平均より若年傾向が目立った。
2. 飲酒のきっかけは、行事・お祝いが43.7%で第1位であった。
3. 飲酒頻度は、毎日飲酒者が21.1%と全国平均より少なく、週4-6日が24.5%と多かった。
4. 宴会の飲酒量は、2-4合が多く、全国平均より量がやや多かった。
5. 晩酌の飲酒量は、1-2合がもっとも多く、やはり全国平均よりも量がやや多かった。
6. 飲酒を抑制する力は、全国平均より弱かったが、つきあいなどを大事にする県民性と関連があろう。
7. 酒の上の失敗は、全国平均よりやや高かった。
8. 「アルコール中毒とは」の問いに、全体の51.2%が「酒をやめられない人」と答えWHOの定義である「精神依存・身体依存」に近い回答であった。
9. アルコール中毒の治療に関しては、積極的治療が必要と考えたものが70.3%と高かったが、本人や家族の意思を尊重する考えもみられた。

文 献

- 1) 草野 亮, 沖 多門, 菅野利克, 中川秀幸
: 富山県民の飲酒実態調査——学校教師の場合——, とやま県医報, No808: 10—15, 1981.
- 2) 草野 亮, 柴美喜子, 中川秀幸: 富山県の
飲酒を考える, 富山県農村医学研究会誌, 13
: 52—62, 1982.
- 3) 草野 亮, 中川秀幸: 富山県民の飲酒実態
調査——一般成人男性の場合——, とやま県
医報, No848: 12—18, 1983.
- 4) 草野 亮, 山野俊一, 中川秀幸, 柴美喜子
: 富山県女性の飲酒状況について, 富山県農
村医学研究会誌, 14: 69—78, 1983.
- 5) 草野 亮: 飲酒と県民性——文化人類学的
考察——, 富山県農村医学研究会誌, 15: 69
—78, 1984.
- 6) 草野 亮: 呉東と呉西——飲酒からみた女
性像——, 富山県農村医学研究会誌, 16: 50
—57, 1985.
- 7) 額田 粲: アルコール中毒の疫学, 加藤伸
勝・大原健士郎・河野裕明編: アルコール中
毒, 18—44, 医学書院, 1973.
- 8) 西川・額田・上野編: 日本の飲酒を考える,
医学書院, 1975.